

# 日本語研修コース実施報告

——2000（平成12）年度後期——

留学生センター 和田 礼子

## 1. コースの概要

開講期間：平成12年10月16日（月）～平成13年2月23日（金）のうちの17週

開講時間数：授業は週に15コマ（1コマ90分）

開講科目と時間

	月	火	水	木	金
8：50-10：20	ドリル	ドリル	ドリル	ドリル	文法
10：30-12：00	文法	会話	応用	応用	応用
12：50-2：20	漢字	漢字		漢字	漢字
2：30-4：00	留学概論				

受講者数：8名

ホンジュラス1名、中国3名、オランダ1名、コロンビア1名、タンザニア1名、インドネシア1名（大使館推薦国費留学生1名、短期交換留学生4名、国費留学生1名、私費研究生2名）

開講レベル：日本語学習歴がゼロの学生を対象とする

対象学生：このコースは大使館推薦国費留学生を対象に開講されたが、本年度は該当者が1名であったため、短期の交換留学生や私費の研究生も受け入れた。（大使館推薦国費留学生は毎期一定ではないので、その数と教室スペースの都合上、今後短期の交換留学生や私費の研究生の受講は制限されると思われる）

使用教科書：Situational Functional Japanese（筑波ランゲージグループ）

Total Japanese Reading and Writing（早稲田大学）

## 2. コースの内容

(1) 学生の来日から、授業開講まで

10月以前に来日していた学生もいたが、多くの学生は10月の初旬に来日した。このコースを受講する学生は日本語学習歴がゼロであるため、授業開始までの約1週間、一日90分、時間を設定して、ひらがな、カタカナの学習、それに、簡単なあいさつを指導した。文字については学習者の来日時期もさまざまで、一斉授業が難しいことから、教官の指導の下、鹿児島大学の日本人学生に依頼し、個別指導を行った。

この時期、留学生センターでは新任の専任教官3名が着任していなかったため、学生の受け入れ

はセンター長と、専任教官1名、それに留学生課のスタッフが行った。またこの期間、鹿児島大学の日本人学生にチューターとして協力してもらった。チューターには、鹿児島空港への出迎え、国際交流会館への入居、大学周辺の案内、市役所、銀行での手続きなど日常生活のサポート、また日本語の授業が始まるまでの文字指導などを依頼した。チューターに対しては事前に2日間トレーニングを行い、心構えやチューターとしてどのような活動をするのかを詳細に知らせることで留学生受け入れの円滑な進行を図った。

来日したての留学生がこの時期をどう乗り切るかによって、留学生活、または日本語学習に対して肯定的、積極的に捉えるのか、それとも不安や不満を抱えた否定的なものとして捉えるのかが決定付けられると言っても過言ではないほど、この時期は留学生にとっても、受け入れる側にとっても、重要な意味を持っている。今後もこのような点をふまえ、学生にとって満足度の高い、不安感の少ない1週間となるよう配慮していきたい。

## (2) 文法、会話の授業について

現在、多くの日本語の教科書が出版されているが、文法の習得に重きをおくもの、コミュニケーションを重視するものとさまざまである。従来、文法中心の学習では運用力がつかない、いくら文法の知識があっても、どのような場面でどう使うかといった運用力がなければ意味がないといった問題点が指摘されてきた。一方でコミュニケーション重視の学習法は文法力が伸びず、中級、上級レベルへの移行が難しい、読み書きが難しい等といわれている。このような指摘を踏まえ日本語教育の現場では両者を折衷させた形の教授法をとっているところが多い。

鹿児島大学の日本語研修コースでは日常的に必要な伝達能力をつけるとともに、コース終了後中級、上級へと進み、日本語で講義を聞いたり、論文を読んだりするための基盤を作るという目標の下、「Situational Functional Japanese Notes, Drills Vol. 1, 2, 3」(筑波ランゲージグループ)(以下「SFJ」と表記)を主教材として採用している。この教科書は伝達(会話)能力と文法能力とのバランスのとれた日本語力の養成を目指しており、また大学生を想定しているため、学生生活や、研究に関する語彙が多く使われている。以下、文法、会話の授業の詳細を述べたい。

- ・文法：週に2コマの文法の時間には英語を使って該当する課の文法を説明した。「SFJ」の特徴として、文法項目を断片的ではなく、まとめて説明するという方法がとられている。日本語の構造といった、大きな概念をまず説明し、そこから順次下位レベルの文法項目に降りてくるといったパターンであるが、このような説明はとかく単語の記憶中心になりがちな初期の授業の中で、日本語に対する理解を促すものである。また、英語という媒介語を使うことで、文法的な意味だけでなく、機能的な意味や、その項目が使われる場面についても細かく説明することができる。また、学生にとっては日本語だけを使った授業では遠慮してできなかったような質問もここで確認することができる。このクラスはコースが進むにしたがって、日本語を使う比率が増えていった。このクラスは英語が共通語という前提で設定されているが、今後は英語がわからない学習者への対応が課題として残されている。

- ・ドリル：ドリルは基本的に日本語のみで行われた。すでに「文法」の時間に説明済みの文法項目について、再度日本語の説明を聞き、口頭で語形変化や句型ドリルを行った。このクラスでは初期は日本語を聞き、口を動かすことで、日本語に慣れることを目標にした。反復学習で、文法や単語の定着を図り、日本語を積極的に使おうという気持ちを喚起するために、該当する文法項目を使った会話練習も行った。

後期になると、単純な練習だけでは物足りないと感じる学生も出てくるようになった。これは、日本語の勉強の仕方がわかり単純なドリルの部分は自分でできるようになるためである。いわゆる自律学習ができるようになれば、自分で学習できる部分と、クラス全体で練習する部分とを区別することができるようになるため、クラス活動はより充実したものになる。今後はこのような学生の成長を視野に入れながら、クラス運営を行っていききたい。

- ・会話：「SFJ」の会話は「郵便局で切手を買う」「指導教官に授業欠席の許可を求める」といった、具体的場面を想定してコミュニケーションのモデルが示されている。また、「あいづち」「確認」といった、会話を円滑に進めるための技術も紹介される。このクラスでは文法や語彙だけではなく、何かを頼むときは「すみませんが」と前置きをすとか、「それはちょっと・・・」といった断りの表現も学ぶ。これは言語活動を通して、日本人のコミュニケーション様式を学び、日本人との意思の疎通を円滑にするとともに、カルチャーショックを予防、軽減しようとするものである。
- ・応用：このクラスは課の最後に設けられ、自然なスピードで話されるテープの聞き取りや、短い文の読み、書き、ゲームなどを行った。しかし、スケジュールの都合上十分な時間が取れなかったことも事実である。この応用のクラスは日本語を実際に使う活動として、今後充実させていく必要がある。

### (3) 「漢字」クラスについて

「漢字」クラスはコース受講者のうち非漢字圏の学生4名が受講した。教科書は「Total Japanese Reading and Writing」（早稲田大学）を使用した。コースの初期にはひらがな、カタカナの定着をはかり、3週目からは漢字中心の授業となった。1コマあたり新出漢字10を目安に導入し、コース終了時までには約300の漢字を学習した。毎回授業の始めには前回学んだ漢字のテスト、授業の終わりにはその時間学んだ漢字のテストを行った。学生の漢字学習に対するモチベーションは高く、正確には書けなくとも、読める、あるいは意味がわかることに達成感を覚えているようだった。

### (4) コースの日程

このコースでは課が終わるごとに小テストを行い、定期テストとしては4課ごとに計5回の筆記テストと8課ごとの会話テストを行った。会話テストは「教官に電話をかける」「クラスメートにインタビューする」といったシチュエーションで、事前に準備をさせてテストに臨んだ。その他、スピーチを3回行った。スピーチは毎回ビデオに撮り、授業の中でフィードバックを行った。

週	日	授 業	特 別 活 動
0	～10/13	ひらがな、カタカナ、あいさつ	10/13 オリエンテーション
1	10/16～10/20	SFJ Vol.1	10/16 開講
2	10/23～10/27		10/27 市内見学
3	10/30～11/2	11/2 L1～L4テスト	
4	11/6～11/10		11/6～11/8 大学祭休講
5	11/13～11/17		
6	11/20～11/24		
7	11/27～12/1	11/28 L5～L8テスト	
8	12/4～12/8	SFJ Vol.2 12/8スピーチ「私の国」	
9	12/11～12/15		
10	12/18～12/22	12/19 L9～L12テスト	12/22 パーティー 12/29 入来訪問
11	1/9～1/12	1/9 スピーチ「冬休み」	1/9 書き初め
12	1/15～1/19		
13	1/22～1/26	1/25 L13～L16テスト	
14	1/29～2/2	SFJ Vol.3	
15	2/5～2/9		
16	2/13～2/16		
17	2/19～2/23	2/23 スピーチ発表、修了式	

### 3. 学生の授業評価

このコースでは授業開始後4週目とコース終了時の2回、学生にコースの評価を求めた。これは文法、ドリル、会話、応用、漢字の教育方法に対して1から5の評点をつけるもので、他にコースに対するコメントを求めた。コース終了時に行った評価の様式と、評価を以下に示す。( )の中の数字はマークをつけた学生の数である。

研修コース授業評価	COURSE EVALUATION	2000秋
1 学習者 Learners		
(1) あなたは授業によく出席しましたか。 5 ( ② ) 4 ( ④ ) 3 ( ) 2 ( ) 1 ( )		
Did you attend the class well ? positive negative		
(2) あなたはたくさん勉強しましたか。 5 ( ③ ) 4 ( ② ) 3 ( ① ) 2 ( ) 1 ( )		
Did you study well ?		
2 授業 classes		
(1) 文法説明はわかりやすかったですか。 5 ( ② ) 4 ( ③ ) 3 ( ① ) 2 ( ) 1 ( )		
Was Grammer explained well and clearly ?		
意見 : opinion:		
(2) 基本文型の練習はよかったですか。 5 ( ④ ) 4 ( ① ) 3 ( ① ) 2 ( ) 1 ( )		
Could you practice basic sentence pattern well and understand fully ?		
意見 : opinion:		
(3) 応用練習はよくできましたか。 5 ( ① ) 4 ( ② ) 3 ( ② ) 2 ( ① ) 1 ( )		
Could you practice application well and acquire how to use the language ?		
意見 : opinion:		

(4) 会話の練習はよくできましたか。 5(②) 4(①) 3(②) 2(①) 1( )

Could you practice conversation well and acquire the skill ?

意見: opinion:

(5) 漢字はよく学習できましたか。 5(③) 4( ) 3(②) 2( ) 1( )

Could you study Kanji well and practically ?

意見: opinion

### 3 全体 the whole course

(1) 研修コースの授業は全体としてよかったですか。

As a whole, how do you evaluate ? 5(③) 4(③) 3( ) 2( ) 1( )

意見: opinion

(2) あなたは研修コースで日本語が上手になったと思いますか。

Could you become skillful in Japanese ? 5( ) 4(④) 3(①) 2(①) 1( )

意見: opinion

(3) ほかに何かコメントがあれば、何でも書いてください。

Besides the above, write any comment you want to add.

途中評価ではコースに対しては「進度が速すぎる」といった意見も見られるが、評点は3から5を付けており4が最も多かった。コメントには「教師の日本語での説明が、理解できないことがある」、「授業で先生が他の人を指名している時、先に答えを言ってしまう学生がいるので困る」というものがあった。この途中評価を行った時期はコース開始後4週間が経って日本語の学習が難しくなり、クラス全体が少し沈滞ムードの時期で、文化の違う国から集まってきたクラスメートの言動に神経質になる学生もいた。学生たちにとっては日本という外国での生活、また、日本語クラスという、多言語、多文化のクラスメートとの接触もまた、ストレスの要因となっているようだった。この評価をうけて、クラスメートの問題については、授業中や授業外に該当の学生と話し合い、他の学生の発言を妨げないように指導した。教師に対するリクエストに関しては、授業を担当する教師に伝えるとともに、学生にはわからないときはその場で聞き返すこと、また、日本語で説明を聞くことの重要性などを説明した。

コース終了時の評価は、途中評価とは、ややトーンが変わり、学生のほうにも余裕が伺えるものであった。授業に対する評点は途中評価よりも高く、概ね4から5であった。コメントも肯定的なものが多かったが、「会話の時間をもっと増やしてほしい」「日本人の学生と話す機会がほしかった」といった意見も数多く見られた。これは中間評価の段階では見られなかったもので、ある程度日本語がわかり始め、これを使ってみたいという気持ちの表れであろうと思われる。また、少数ではあるが英語があまりできない学生からは「英語の使用を制限してほしい」という意見もあった。研修コースは一般的には東南アジア、アフリカ、アラブ、中南米などの遠隔地出身者が大勢を占めるため、今後も英語の使用は一定程度認めざるを得ないと思われるが、学生の意見は可能な限り今後の

コース運営に反映させていく所存である。

#### 4. クラスのあゆみ

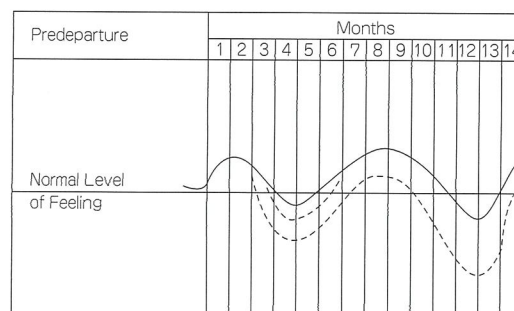
コースが始まった当初、学生たちは一様に緊張していた。新しい環境、新しいクラス、初めて学ぶ日本語。ストレスも大きかったと思う。授業の進度が速すぎると訴えてくる学生もいた。また、学生の中には専門の授業に出席するためにやむをえず日本語の授業を定期的に欠席する学生もいた。しかし、研修コースのように集中的に授業を進めるコースでは欠席による遅れは致命的で、クラス運営にも大きく影響することを、ここで強調したい。

またコースの途中、授業に全くついていけない学生がでてきた。授業時間以外に教師が指導したが、第1回目の文法テストの段階で本人と、指導教官を交えて話し合いを行い、研修コースよりも進度の遅い一般コースの初級会話クラスに移ることになった。(一般コースは日本語補講として研究生、学部生に開講されているコースで、週あたりの授業時間数が1～3コマと、研修コースよりも少なく、その分進度もゆったりしている) 日本語習得のスピードは個人差によるものが大きく、今後もこのような問題が出てくることは大いに予測できる。コース開始から約一か月の間にコースの進捗に対する不満、クラスメートに対する不満、説明方法に対する不満などが出てきた。この時期においては、学生はストレスを感じている様子だった。

ところが不思議なもので、教科書が「SFJ Vol.1」から「SFJ Vol.2」へと変わったあたりから、学生の不満が少なくなってきた。学生に聞いてみると、「『SFJ Vol.1』は本当に難しかったので『Vol.2』はそれ以上だろうと恐れていたところ、意外に簡単で日常生活で役に立つ表現も多いので、学習が楽しくなった」とのことだった。クラスの雰囲気も明るくなり学生にも余裕が見られるようになった。これは学生が日本語に慣れて来たこと、学習の方法がわかってきたことがその理由だろう。

また、この初期課程における授業受容の変化は奇しくもカルチャーショック理論の理論的モデルに見事に符合するものである。すなわち、異文化受容の初期にあつては、当初の高揚期を経た後、沈滞期を迎えるという説がある。L.Robert Kohls はこのような変化を Culture Shock Cycle として、次のように図示している (注1)。

Culture Shock Cycle  
For a Two-Year Assignment



今期研修コースの前半に見られた沈滞ムードは異文化適応の一つの過程であると考えることができ。来日して間もない学生が多かれ少なかれ直面する大きな山である。この山を乗り越える手助けをするのが我々スタッフの役割だろうと考える。

#### 5. 2000年度後期日本語研修コースを終えて

鹿児島大学留学生センターにとって日本語研修コース第1期生となる学生たちのスピーチ発表を2月23日に行った。スピーチ発表とともに、作文集も作成したが、これらはまさに学生たちの日本語を最大限に引き出すものとなった。留学生のスピーチ大会と呼ばれるものの中には、明らかに当人の実力以上の、まさに作られた原稿を丸覚えして発表するといった類のものが見られることがあるし、学生が英語で書いてきた原稿を日本人が翻訳して発表させるということもあるようだ。しかし、今回のスピーチ発表は、学生が自分の頭で考え、生み出したものばかりだった。この発表には研究室の指導教官や、留学生センター運営委員の先生方にも多数参加していただいたが、留学生の日本語に対してどのような印象を持たれただろうか。通常英語でしかコミュニケーションしていなかった先生は「10月にはひらがなもわからなかったのに、ずいぶんうまくなったものだ」と思われたようだが、中には「毎日勉強しても、この程度しかできないのか」と思われた先生もいたかもしれない。どちらにしても、この研修コースで到達する学生の日本語のレベルをある程度、実感をもってわかってもらえたのではないかと思う。

スピーチのあと質疑応答を行った。日本人は日本語で質問し、これに学生が日本語で答えるのだが、学生は日本人の質問がすぐには理解できず、司会者が留学生の分かる日本語で言い換えるという場面が何度かあった。日本語教室外の日本人と留学生がコミュニケーションする場面では学生の日本語力を把握している教師が日本語を日本語で通訳することが多い。この時教師が使用しているのがフォリナートークForeigner Talk と呼ばれるものである。フォリナートークとはある言語の母語話者がその言語を第二言語として習得する者と意志疎通を図るために使う、言語学的修正が加わった特殊な話し方である。このフォリナートークは、日本語の基本文型が多用され、助詞が省略されない、非文や未完成文が少ないなどの特徴を持つ(注2)。日本語のクラスにおいて日本語のみで授業が進められるのは、教師が学生の既習の語彙と文型を把握した上で日本語を使用するからである。フォリナートークはあくまでも修正の加わった言語であるため、批判もあるが、日本語指導の一つのテクニックとしては、認知されている。フォリナートークは上級レベルの学習者には歓迎されないが初級レベルの学習者との意志の疎通には役立つし、日本語だけで意志の疎通が図れることで日本語学習を持続させるためのモチベーションとなる。日常的に留学生と接する教官や日本人学生には、できれば日本語で話して頂きたいが、どう話せば留学生が理解できるか少し参考にしていただければと願う次第である。

日本語研修コースはようやく1期終えたばかりでやるべき課題は山積している。中でも、今期の学生から要望の出ていた日本人学生との交流の場を設定したり、日本語学習のためのチューターを組織することは急務であろうと思われる。これは留学生のみならず鹿児島大学日本人学生の国際理

解の一助になると期待するものである。

また、教材の開発については、自習用教材を充実させることで、学習者間のレベル差を少なく抑えたい。近年レベルの異なる多様な学習者に対応するために「自律的学習」の促進が唱えられている（田中・斉藤1993）が、学習者が学習を自己管理できるよう、教師は環境作りをする必要がある。日本語教材の充実はその足がかりである。自律学習を促進することで、クラス活動をさらに充実させ、コース全体をレベルアップしていくことが今後の目標である。

#### 注

注1) L.Robert Kohls (1996) Survival Kit for Overseas Living. P96を参照

注2) 志村明彦 (1989)「日本語のForeigner Talk と日本語教育」を参照

#### 参考文献

- 
- (1) L.Robert Kohls (1996) Survival Kit for Overseas Living. Intercultural Press
  - (2) 岡崎 眸(1988)「第二言語習得の促進を目指す聴解指導—Comprehensible Input の場合—」  
『日本語教育』64号 P86-98
  - (3) 志村明彦(1989)「日本語のForeigner Talk と日本語教育」『日本語教育』68号P204-215
  - (4) 坂本正他(1989)「「日本語のフォリナートーク」に対する日本語学習者の反応」  
『日本語教育』69号P121-146
  - (5) 田中望・斎藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際』大修館書店
  - (6) 小山 悟(1996)「自律学習促進の一助としての自己評価」『日本語教育』88号P91-103